

工務店2.0
建築を、もう一度、始動の場所へ

住まいは、終着点から始動の基地へ——。性能が横並びとなり、価値観が転換点を迎える今、建築には性能の先にある理由まで提案する力が求められています。

今回は、LGSシステムを背骨に思想と仕組みを一体化するデイトナハウス×LDKの新概念「工務店2.0」と、その実装を支えるVCネットワークについてご説明します。

テクノロジーの進化、働き方の多様化、価値観の再定義が進み、世界のシステムは静かに入れ替わっています。かつて「家を建てる」ことは人生のゴールでした。しかし今、人々が求めているのは、**「安住」ではなく、始動**です。

●モノの所有よりも、経験を重ねる生き方

●便利さだけでなく、自分の感性を信じる選択

●安定の先に、あえて挑戦を選ぶ姿勢
この変化の本質は、**「生き方の自由」**を取り戻す自然な反動だと捉えます。住まいが「終着点」だった時代から、建築が「出発点」になる時代へ。建築とは、人が「どう生きたいか」を形にする行為です。つまりそれは哲学であり、文化であり、思想そのものです。デイトナハウス×LDKが提唱する「工務店2.0」は、この時代の転換期における、一つの思想的回答なのです。だからこそ、次に問われるのは「数値」ではなく「理由」です。

性能の時代は終わった
では、何が問われるのか？

断熱・耐震・省エネは満たして当然

の前提になりました。すべての工務店が同じ性能を語る時代に、差異はどこに宿るのか？ 前提が横並びになるほど、価値は「なぜこの形か」「なぜこの素材か」「なぜこの空間なのか」という、理由へ移ります。

私たちは、装飾で飾るのではなく、構造に語らせる。ことを主軸にしています。鉄が持つ素材の声を隠さず、空間の芯に据える。余計なものを削ぎ落とす誠実さが、使い手の創造性を引き出し、空間を「生きるための道具」へと育てると考えているからです。

その答えを、つくるだけでなく、提案。として届けるのが、デイトナハウス×LDKが考える、これからの工務店像です。

工務店を「請負」から「提案」へ

図面通りに正確につくる力は、これから工務店の誇りです。そのうえで「工務店2.0」が重んじるのは、暮らし方、働き方、街や文化との付き合い方まで含めて「どう生きたいか」を共に考え、提案する姿勢です。

住宅を、**「買うもの」**から、**「使いこなす道具」**へと捉え直すと、打合せで交わす言葉も、完成後に立ち上がる

る日常の風景も変わります。

デイトナハウス×LDKは、その考えを宿した独自のプロダクトを開発してきました。私たちが目指すのは、所有の記号ではなく、使い手の関与によって価値が立ち上がる「道具としての建築」。使えば使うほど身体に馴染み、手入れや改良の痕跡が層をなし、経年とともに唯一の表情と気配が深まっていく——そんな器です。

間も多様化しました。建物は固定資産というより、運用できる道具に近づいています。

ガレージを核にした賃貸やSOHO、店舗併設の住居、リゾート拠点としての平屋など、用途を横断する要望も増えています。



この視点では「所有」よりも「活用」を重んじ、空間の心地よさに加えて、収益、運用、地域循環といった現実的な価値を同時に設計することで、使い手にも街にも良い流れが生まれます。

企画段階から事業性のシナリオを併走させる——これが、持続可能な提案の第一条件で、「価値」の設計と対になるのが、空間そのものが人に与える「力」の設計です。

01

デイトナハウス×LDKなら
ひとつの施工ノウハウで
様々な建築に対応可能

LGSシステム

デイトナハウス×LDKは、ひとつの工法＝LGSシステムで、住宅からガレージアパート、店舗、リゾート施設までを一貫対応できるのが特徴です。ボルトオンで組み上げる共通骨格は、高い再現性とスピード、安定した品質を実現しつつ、地域や用途に応じた自由な表現を可能とします。

高床式
平屋建築
TYPE-F賃貸ガレージ
アパートメント
GLB店舗系建築
TYPE-S住宅系
商品

工務店2.0の条件②

空間を、**「生きるエネルギー」**の増幅装置として考える

空間は行動や感情に作用します。良い器は、良い行動を呼び起こします。朝、ガレージの扉を開ける所作。窓辺で風を感じる数分。夜に木の香りがふっと立ちのぼる瞬間。そうした微細な体験の連なりが、その人の創造性や健やかさを支えます。その体験を現場で、同じ温度で再現する骨格が必要です。それがデイトナハウス×LDKの建築システム「LGSパネル」です。

LGSパネルという、思想の翻訳装置

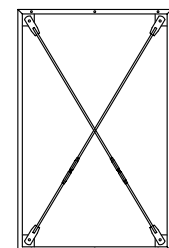
デイトナハウス×LDKの中核は、モジュール化したLGSパネルです。ベトナム・ホーチミンやハノイの提携工場高精度に製造し、海上輸送で日本各地の現場へ。現場溶接に頼らずボルトオンで組み上げるため、品質の再現性が高く、工程の見通しも安定します。着工後4ヶ月～5ヶ月で竣工できるスピード感も特長の一つです。現場負担を抑えながら、構造物そのものを、魅せる、ことができます。

「モジュール建築やプレファブ建築は味気ない」という固定観念は、素地を隠さない設計で裏返ります。鉄の肌理、ボルトの陰影、リブのリズム感——機能を突き詰めた先に造形が立ち上がるのがLGSパネルです。

パネル化は工期短縮の手段にとどまりません。熟練の技をモジュールとして継承し、人手が細る時代にも

What's DAYTONA HOUSE×LDK?

デイトナハウス×LDKの建築システムを構成するのが軽量鉄骨のLGSパネル。厚さ3mm～4mm、幅12.5cm、厚み5cmの「Cチャンネル」と呼ばれる部材を、横幅182cm、縦270cmの長方形に溶接して製作。デイトナハウスは、この基本の形を連結することで、住宅やガレージのみならず、別荘、店舗、賃貸住宅などの様々な建築を作っていく、全く新しい建築のカタチとなっています。パウダーコーティングが施されたその鉄の素材感と、力の伝達を受け持つ「ブレース」が織りなす、インダストリアルで飽きの来ない空間のテイストも持ち味となっています。



LDK inc. 代表 玉田敦士

デイトナをはじめ、カーマガジンでの長期連載、ムック本であるCAR&HOMEにて、常にクルマと住宅の関係について提案し続けてきた建築プロデュース会社LDK inc. 建築設計はもちろんのこと、建築システムの開発や商品開発も行う。

www.daytona-house.com

VCはフランチャイズではなく、思想で結ぶ共同体。

全国で同じ思想と同じ工法「LGSシステム」を共有しながら、それぞれの地域で最適な表現を更新するために、私たちはVC（ヴォランティア）を採用しています。上意下達の統制ではありません。共通の骨格LGSパネルを使いつつ、風土、文化、気候に合わせて自由にアレンジする水平連携の仕組みです。

図面、納まり、工程運用、情報発信の知見がネットワーク内で循環し、離れた地域の仲間とも、同じ背骨でつながります。統一の上に多様性を咲かせる。これが、実務と表現を両立させる基盤です。

そして、デイトナハウス×LDKのVCネットワークが目指すのは、ゼネコンと地場工務店の間に広がる領域です。フレキシブルな組織力と品質

時代に自由を求めて世界を巡りました。これらの体験は、物質的な豊かさとは異なる精神世界を求める彼の価値観を形成し、後のアップル製品のデザイン哲学や思想の根幹をなしました。その徹底した自由志向と「テクノロジー」が結びついた結果、のちの巨大テック企業群に象徴される新しい産業のかたちが生まれたのです。

彼が常に重視したのは、「体験の芯」をまず定め、そこから逆算してハードもソフトも、素材も製造も、伝え方すらも揃えていく姿勢でした。自由に開かれた発想で出発しながら、最後は手触りまで一貫させる。この「自由」と「貫性」の同居こそ、いまの建築に通底する学びだと考えます。

私たちは、思想×骨格×LGSで体験の芯を共有し、仕上げと運用を地域の言葉で調整します。世界の変化を読み取りながら、最後は現場の手触りで答えを出す。『グローバルに考え、ローカルに建てる』ということの実装です。

クラフト・インテリジェンス
『手』と『頭』を併せ持つ人へ

これからの建築に求められるのは、現場の勘所（手）と社会、技術の理解（頭）を併せ持つ人材です。鉄や建築現場の匂いを知り、風の向きを肌で読みながらデータや制度の変化も把握します。

地域の環境や状況に耳を澄ませつつ、現在デイトナハウス×LDKでも導入検討している「BIM (Building Information Modeling)」などの次世

代プロセスを、段階的に取り入れていきます。アナログとデジタルを往復できる体制は、表現の自由度と品質の再現性を同時に高め、人手構成の変化にも強い現場をつくります。BIMは図面の「貫性」と数量の見通しを確かにし、LGSシステムのモジュールとも自然に噛み合います。

この人材像は、私たちが想定する『能動的に生きる顧客像』と響き合います。使い手の生き方に触発され、現場がまた一段洗練されていく。その循環こそ、デイトナハウス×LDKが目指す「工務店2.0」のエンジンなのです。

デイトナハウス×LDKのお客様
『人生を能動的に生きる人』へ

私たちの主たるお客様は、人生を能動的・積極的に生きる方々です。

- モーターライフを愛し、クルマやバイクを相棒に暮らす人
- 移動そのものを糧とし、旅やドライブから発想を得る人
- 賃貸を投資だけでなく『自分の活力』と捉え、場づくりを通して街の価値を育てる人
- 地域で商いと文化を育み、交流を生み出す人
- 都市、海、山を行き来し、多拠点という生き方を実践する人
- 風と光と静けさに寄り添い、自然とともに過ごす人

そしてもちろん、遊びも仕事も前向きに楽しむ加盟店を始めとする工務店も、私たちにとても大切なお客様の一つです。こうした方々に届く言葉と像を持つために、発信は、設

計の一部。になるのです。

情報発信は『設計の一部』。

良い建築は、それ自体がメディアと考えています。実例の撮影、言語化、SNSや誌面での発信は宣伝ではなく、設計思想の共有という位置づけ。誰に何を届けるかを明確にし、量より解像度を重んじて深い情報を丁寧に届けます。

発信→反応→改善を設計と施工に還流させ、次の提案の精度を上げます。VCネットワークでは、このための共通言語と素材を整え、各社が日常的に『語れる』状態を支えます。

思想は持続可能か？

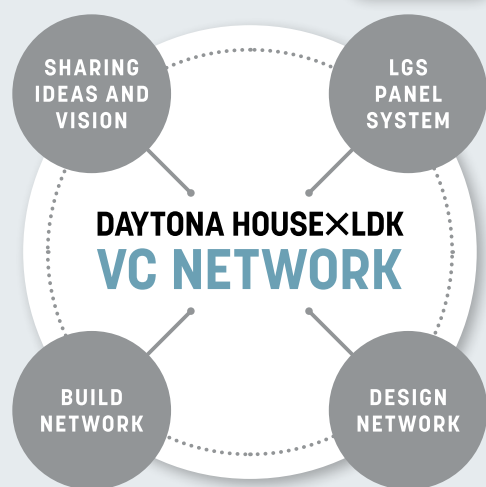
思想は美しいだけでは続きません。では、美しさと持続性は両立するのか？ デイトナハウス×LDKの答えは「『する』」です。

体験価値が明確な賃貸や、地域と結びつく店舗、拠点は、周辺相場の1.4倍〜2倍の賃料設定でも選ばれる傾向があります。ガレージ付き賃貸や店舗併設住宅は、単なる「住む場所」ではなく「生き方を支える装置」として機能するからです。

たとえば、周辺相場が月8万円のエリアで、GLBは月15万円。それでも満室。なぜか？ 住人が求めているのは「家賃の安さ」ではなく「暮らしの質」だからです。企画段階から運用、収支のシナリオを併走させ、思想と数字を両輪で回す——それが続けられる提案の条件です。こうして積み上がるのは、かっこよく、賢く、持続できる、建築です。

デイトナハウスのVCネットワークは思想の共同体

デイトナハウスVCネットワークは、決められた商品だけを売るフランチャイズではなく「思想の共同体」です。共通の背骨となるLGSシステムと設計思想を共有しながら、各地の風土に合わせて表現を更新していきます。図面、納まり、工程、発信ノウハウまで知見が循環し、離れていても「同じ骨格」でつながります。統一の上に多様性を咲かせ、ローカルで確かな品質と提案を実現する仕組みです。



04

建設業界における4つの企業形態

大手ゼネコン

超高層ビルや公共施設、インフラ整備など、国家規模の大型案件を専門とする企業群です。設計から施工までを一貫して担う体制と、圧倒的な技術力・資金力を有し、公共性・安全性の高いプロジェクトで確固たる地位を築いています。その一方で、大規模組織ゆえに意思決定のスピードが遅く、固定的なコスト構造による価格競争力の低下や、個別案件への柔軟な対応力の不足といった課題も抱えています。

中小ゼネコン

地域を拠点に、民間の中規模案件を中心に手掛ける企業群です。現場に密着した施工管理能力と、迅速かつ丁寧な対応に定評があります。大手に比べてフットワークが軽く、コストパフォーマンスに優れる一方で、建築デザインやブランディングの面では課題を抱える企業が多く見られます。また、多くが発注者からの依頼ベースで動く受託型ビジネスに依存しており、事業の差別化や独自の価値創出に成功している企業は限定的です。

ハウスメーカー

住宅建設に特化し、工業化・標準化された建築システムによって、品質と価格の均一性を実現している企業群です。展示場営業やテレビCMなどを通じた高いブランド認知力を持ち、安定した供給体制を確立しています。一方で、あらかじめ規格化されたプランが中心となるため、顧客の個別ニーズやライフスタイルに応じた自由設計への対応には限界があります。また、建築そのものの表現力や空間の独自性という点では、均質化の傾向が否めません。

工務店

地域の職人ネットワークを基盤に、木造注文住宅やリフォームを中心に展開している事業者です。施主との距離が近く、柔軟な対応や地域特性に根ざした家づくりを得意としています。その一方で、マーケティングや情報発信においては弱く、経営スケールや施工範囲にも限界があるため、安定した事業拡大が難しい傾向にあります。職人気質の誠実な仕事と地域密着型の信頼関係が強みである反面、ブランド化や差別化は容易ではありません。



02

管理体制を持ちながら、地域への深い理解と柔軟な対応力を併せ持つ。その両立が、これからの建築業界に求められる新しいモデルだと考えています。

『anywhere』と『somewhere』
二つのまなざしをつなぐ建築へ

人の暮らし方は、いま大きく二つの方向に開いています。場所に縛られずに働き暮らす『anywhere』的な生き方と、地元の土や文化に根を下ろす『somewhere』的な生き方です。イギリスのジャーナリスト、デイヴィッド・グッドハートは著書『頭、手、心』で、この二極化を指摘しました。テクノロジーが進むほど国境を越えた働き方は現実味を帯び、同時に「ここで暮らすこと」の意味もいっそう確かになります。私たちは「どちらを選ぶか」ではなく、両者を橋渡しする器を設計する立場です。

たとえば、リゾート地のガレージ付き賃貸は、住居でも観光でもない中間的な滞在を受け止め、移動する人の創造性と地域の文化、経済をゆるやかにつなぎます。店舗・事務所向けの器は、地元の商いとコミュニティを育てる核になり、自然と寄り添う高床式の平屋は、都市化から脱出した多拠点生活の基盤になります。

この交差点の設計思想は、自由と「貫性」の両立にあります。ヒントの一つが、次章のジョブズです。

ステイブ・ジョブズが示した「自由」と「貫性」

若き日の彼は、価値観が揺れ動く

“anywhere”と“somewhere”

デイトナハウス×LDKでは、都市に暮らしながら建てる場所は美しい海や山のある地方というご相談が増えています。二拠点生活の「器」となる拠点づくりや、ガレージアパートを一部自用し、残りを賃貸運用するなど、多様なスタイルが実現されています。ここで重要となるのが、各地の職方と連携しローカルでの施工を可能にするVCネットワークなのです。

03



建築を、もう一度ワクワクする仕事に
共通の骨格でつながり、地域の言葉で表現し、使い手の生き方に寄り添う。デイトナハウス×LDKのVCネットワークはフランチャイズではなく、思想の共同体です。定住だけでなく、流動する暮らし方まで受け止める器を増やすことは、ローカルの循環と創造を静かに育てます。

次にどんな一日をスタートさせるか。その『芯』を共に定め、LGSという背骨で確かにし、仕上げと運用で「ここならでは」へ着地させる。「工務店2.0」とは、仕事と遊び、そして創造性を連動させる概念です。我々が目指すのは、誰かの「始動」になる建築です。そこから、楽しく、新しい何かが生まれると思っているからです。